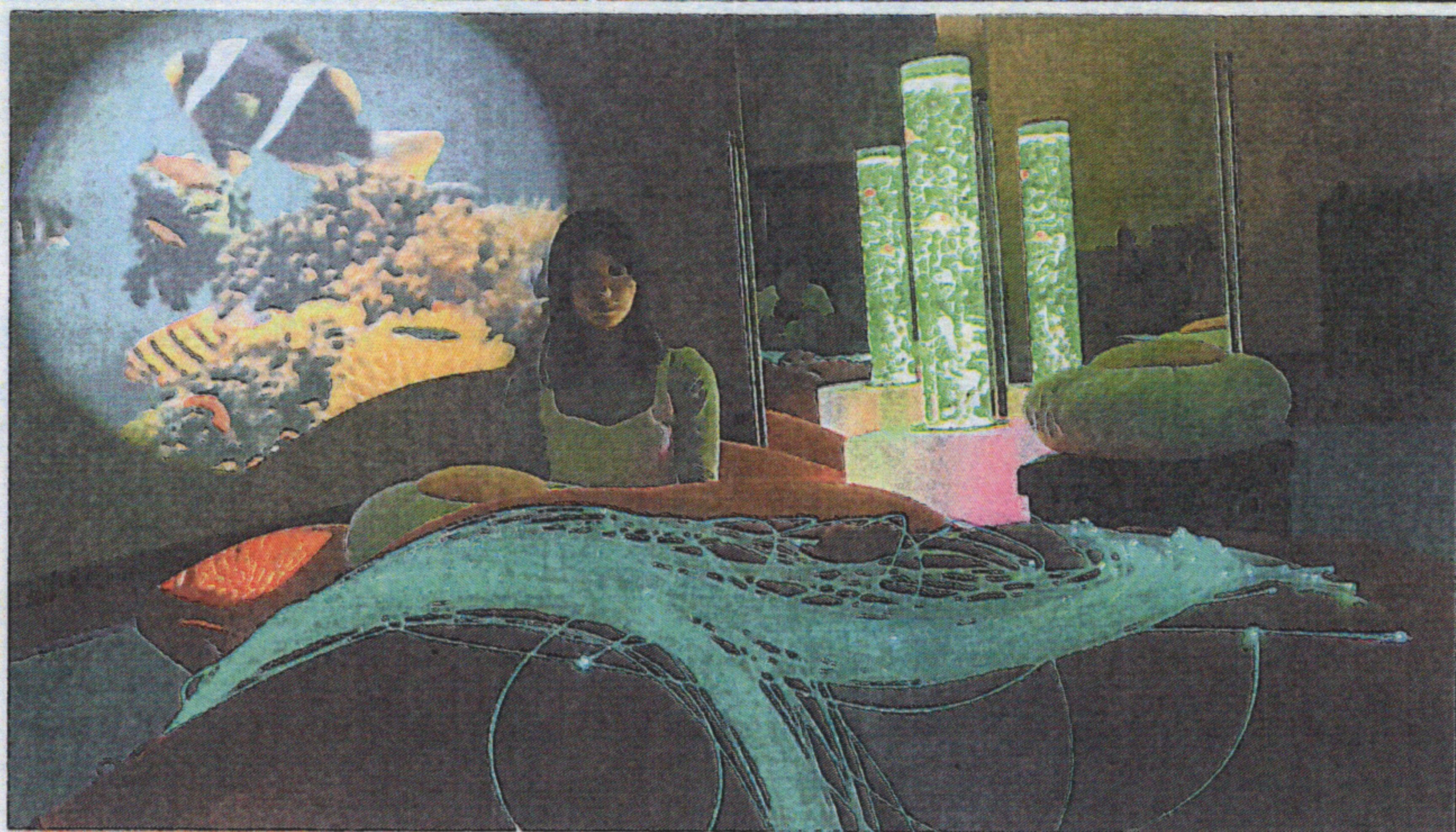


「感覚刺激」福祉や教育に

光や音、香り生かす作業療法「スヌーズレン」



スヌーズレンの装飾が施された室内。光や音、香りによってリラクセスできる環境が整えられている

国内では認知度の低い作業療法の一つ「スヌーズレン」を実践し、周知する活動に九州女子大（八幡西区）の姉崎弘教授（特別支援教育）が取り組んでいる。光や音、香りなどの「感覚刺激」を通じてリラクセスと活性化を図る手法で、重度の心身障害者ら向けにオランダで開発された。大学の授業だけでなく、昨年末からは学外でも研修会を開き、知識や技術を持つ専門家の育成を目指している。

姉崎教授によると、スヌーズレンは、オランダ語で「くんくんにおいを嗅ぐ」と「唐眠りする」の言葉からなる造語で、1970年代に生まれた。医学界で一般的な治療法などに比べて

九州女子大 専門家育成へ研修

研究論文は少ないが、先進国のオランダやドイツでは知的・精神障害者や認知症の高齢者などが過ごす教育や福祉の現場で幅広く実践されているという。

同大人間科学部では、体が不自由な人たちに対する指導法の一環として、スヌーズレンを教えている。照明を落とし、アロマの香りが漂う部屋で行われる実技では、円柱型チューブ内を上昇する水泡がさまざまな色のライトで照らされ、泳ぐ魚の写真がプロジェクターで壁面に映される。学生たちは室内に置かれたクッションに寝転び、心身のリラクセスを体感する。

「居心地の良さ」は人それぞれ。実際の現場では当事者や保護者と話し合うな

どして感覚や感情を把握し、その人に合った空間を作ることが有効性を決める鍵になるという。小学校教員を目指す4年生の井藤夕楓さん（22）は「学んだのは意思の尊重」と話す。「室内では何を触っても何をしても良くて、静かな中で子どもたちに『自分の場所』を見つけてもらうのがスヌーズレン。子どもに寄り添える先生になりたい」と言う。

姉崎教授はこれまで、JR黒崎駅そばの複合施設コムシティ内で研修会を4回開催。県内外から特別支援学級の教員や障害者施設の責任者、理学療法士らが出席した。「科学的なデータは十分とは言えないが、発達障害や不登校の児童らの適応力が増した例も報告されている。理論の普及と実践を通して、専門家を育成していきたい」と話している。

スヌーズレンを巡る問い合わせは、姉崎教授090（9948）7174まで。（座親伸吾）